



NEWS LETTER

12

March 2022 Number

ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表 岡室 美奈子

演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、2009年度より文部科学省から認定を受けた共同利用・共同研究拠点として活動を発展させてきました。本拠点の特色は、100万点を超える資料を収蔵する演劇博物館が母体であることを活かし、演劇博物館の収蔵資料のうち十分に学術利用がなされていない貴重な未公開資料・非公開資料を共同研究に供することにあります。3度目の認定を受けた昨年度はコロナ禍のため一次資料を前に対面で共同研究を実施することが困難となりましたが、演劇博物館のデジタルアーカイブの実績を活かし、現在はデジタルデータやオンラインツールを複合的に活用した新たな共同研究の推進を行っています。

本拠点では演劇博物館の所蔵資料を対象とする共同研究として3種の研究が行われています。昨年度から継続採択されている5件の共同研究チームは2年間の研究活動を豊かに発展させました。①本拠点が研究テーマを提案する「テーマ研究」では、別役実旧蔵草稿資料を対象とするチームが昨年度の成果を演劇博物館の春季特別展「別役実のつくりかた」とその図録に発展させました。②演劇博物館の貴重な資料を研究対象とする共同研究課題を全国から募集する「公募研究」では本年度が各チームの最終年度となるため、栗原重一旧蔵楽譜、戦前の映画館広報資料、役者絵本、常磐津節正本板木を対象とする4件の研究課題が考察を深め、成果報告冊子の刊行、公開研究会の実施、対象資料のデータベース公開作業等を通じて研究成果を

く国内外の研究者に発信する活動を行いました。③演劇博物館の研究者が将来の共同研究に向けて演劇・映像資料の調査を行う「奨励研究」では、学内外の研究者とも協力しながら新たに6件の研究課題により多岐にわたる演劇博物館の所蔵資料の調査・考証が進められ、一部の成果は企画展や常設展で発表されました。



演劇博物館春季特別展
「別役実のつくりかた」チラシ
Flyer for the exhibition, Making of
Minoru Betsuyaku

こうした演劇博物館の資料を核とする共同研究に加え、昨年度から推進されてきたコロナ禍における演劇界の動向を調査・記録する「特別テーマ研究」では2つの研究チームが調査・研究を継続・発展させ、広く注目を集めました。国内のコロナ禍の演劇公演の調査チームは昨年度の成果を演劇博物館の春季企画展「Lost in Pandemic——失われた演劇と新たな表現の地平」とその図録に発展させました。海外の演劇と文化政策に関する調査チームもこの展示を機に昨年度作成した成果報告冊子を増補改訂し、展示室やウェブサイトで広く公開しました。

さらに、本拠点は国内外の研究機関との連携事業や資料のデジタルデータを活用した共同研究の開拓事業も進めています。浄瑠璃丸本のデジタル画像を利用して凸版印刷株式会社と2016年から進めている「くずし字OCR」事業では、これまでの成果を教育利用に活かしてカリフォルニア大学ロサンゼルス校やお茶の水女子大学とともに国際的ワークショップを実施しました。また、デジタル化した映像資料の利活用やコロナ禍の演劇・文化のアーカイブなど多角的な事業の推進を図りました。

本拠点は今後も、演劇博物館が所蔵する豊かな研究資源とデジタル技術を活用し、国内外の研究機関と連携した共同研究のハブとして活動して参ります。今後ともみなさまのご支援とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

contents

■拠点代表あいさつ	1 p
■令和3(2021)年度 特別テーマ研究成果報告	2 p
■令和3(2021)年度 テーマ研究成果報告	3 p
■令和3(2021)年度 公募研究成果報告	4 p
■令和3(2021)年度 奨励研究・拠点主催事業成果報告	8 p
■Mission and Vision	9 p
■Report on urgent theme research, fiscal 2021	10 p
■Report on principal research, fiscal 2021	11 p
■Report on selected research, fiscal 2021	12 p
■Encouragement research/ Projects organized by the center, fiscal 2021	16 p

特別テーマ研究

国内外のコロナ禍における国内外の舞台公演に関する調査・研究プロジェクトである「特別テーマ研究」として、2021年度は2件の研究課題が活動を継続しました。

特別テーマ研究課題1

新型コロナウイルス感染症の影響下における日本演劇界の調査研究

研究代表者：後藤隆基（早稲田大学演劇博物館助教）

研究分担者：伊達なつめ（演劇ジャーナリスト）、吉田祥二（ロングランプランニング株式会社編集長兼取締役CMO）

本研究では、前年度のテーマを継続し、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響によって中止・延期になった公演や新たな表現の可能性、社会と舞台芸術の関わりについての実態調査、情報・資料収集を行った。コロナ禍下の〈いま・ここ〉を演劇という視座から記録し、未来に伝えることを企図したものである。

本研究の成果として、演劇博物館春季企画展「Lost in Pandemic——失われた演劇と新たな表現の地平」（6月3日～8月6日）を開催した。5月17日オープンの予定だったが、三度目の緊急事態宣言にともなう東京都の要請によって初日を延期。2020年2月下旬からの一年余という時間——相次ぐ公演の中止・延期や劇場の閉鎖から再開への動きなど、事態の“序盤戦”における模索と試行錯誤を、個別の記憶や感覚が失われる前に記録にのこし、次代に伝えることに主眼を置いた。展示会場にめぐらされた「新型コロナウイルスと演劇 年表」が、来館者個別の記憶を呼び覚ます装置ともなった。

本研究チームの調査では、コロナ禍の影響で中止・延期になった公演——「失われた公演」のタイトル数は、2021年6月時点で2000をゆうに超えた。また、コロナ流行下の社会を象徴する「オンライン」「社会的距離」「マスク」「新しい日常」といったトピックは、私たちの生活や社会、日常と演劇、劇場空間がいかに地続きであるかを浮かびあがらせた。そうした制約を克服するための新たな表現も数多く

試みられ、感染対策等も含めた制作現場の取組をとりあげた。併せて近世以降の疫病と演劇に関する館蔵資料も紹介。過去から学ぼうとすることは、我々が未来に何を残せるのかという課題に直結する。図録を兼ねた書籍『ロスト・イン・パンデミック——失われた演劇と新たな表現の地平』は、100人をこえる関係者の証言や論考、コロナ禍をめぐる社会状況と演劇界の動向を紐づける年表、中止・延期公演リスト等から成る記録集であり、展示と対になって「Lost in Pandemic」という企画の総体を形成する。数世紀後に同じような事態が世界を襲ったとき、2020年という時間を参照しうる記録が編まれるべきであり、本研究の意義と重要性はそこに集約される。今後の課題として、演劇という分野の縦横／内外の連携を構築、発展させ、本研究課題を展開することが必要かつ重要とおもわれる。



春季企画展の展示風景

Main exhibition room of the Spring Exhibition

特別テーマ研究2

COVID-19 影響下の舞台芸術——欧米圏の場合

研究代表者：伊藤愉（明治大学文学部講師）

研究分担者：萩原健（明治大学国際日本学部教授）、藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）、田尻陽一（関西外国語大学名誉教授）、戸谷陽子（お茶の水女子大学人文科学系教授）、大崎さやの（イタリア演劇研究家）、辻佐保子（早稲田大学文学学術院講師（任期付））、田中里奈（明治大学国際日本学部助教）

本研究プロジェクトでは、欧米圏（フランス、ドイツ、オーストリア、スペイン、イタリア、イギリス、アメリカ合衆国、ロシア）を対象としたコロナ禍における舞台芸術の状況と文化政策を調査した。各国の文化政策、演劇界の状況は様々であるため、参加者各自が専門とする言語圏の主要な都市圏を対象に調査を行った。本年度は特に演劇博物館の春

季企画展における成果発信を主目標とし、昨年度から継続して、広く社会との関係を探るべく文化政策を軸に、各国の舞台芸術状況を中長期的な視野で捉えることを試みた。

本年度は昨年度まとめた成果にその後の情報を加筆して刊行し、演劇博物館の展示室で配布したほか、演劇映像学連携拠点のウェブサイトで広く公開した。

テーマ研究

1

別役実草稿研究

研究代表者：梅山いつき（近畿大学文芸学部准教授）

研究分担者：岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授、演劇博物館館長）、後藤隆基（早稲田大学演劇博物館助教）

【研究目的】

本研究は、2019年に寄贈された「別役実自筆原稿」および、別役作品に関連する資料の調査を通して、別役の劇文体について検証するものである。演劇映像学連携研究拠点におけるこれまでの研究では、まず未整理資料を中心に、膨大な寄贈資料の全容を把握することに努めた。その結果、未整理資料の中には、20代の頃のものと思われる創作ノートや1960年代の初期作品に関係する重要な資料が含まれていることが明らかとなった。本年はこうした初期の創作活動を紐解く上で重要と思われる資料の考証を中心に行った。

【研究成果の概要】

調査結果を踏まえ、本年は6月3日から8月6日にかけて演劇博物館で特別展示「別役実のつくりかた——幻の処女戯曲からそよそ族へ」を開催し、研究成果の一部を公開すると共に、表象文化論学会第15回大会でパネル発表「新出資料から見る別役実の世界」を行った（7月4日、オンライン開催）。

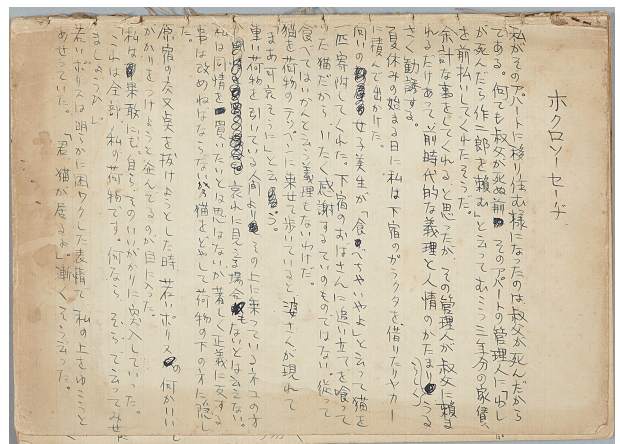
展示では、向井優子学芸員（研究協力者）が展示構成を担当し、本研究の調査によって発見された幻の処女戯曲『ホクロ・ソーセージ』[64256]や初期を代表する作品『象』の草稿[64257]、さらに『象』の原作とされている「アカイツキ」の草稿を紹介した。他にも『そよそ族』シリーズを手がけるにあたって、別役自身が手がけた地図等、作品完成までのプロセスを辿れる重要な資料も展示した。

学会発表では、梅山いつきは少年期の作文や若き日の創作ノートと『ホクロ・ソーセージ』に光を当て、別役作品における「沈黙」のルーツを探った。後藤隆基は、別役が多大な影響を受けたと思われる宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を題材としたアニメーション映画やラジオドラマの脚本を公刊されている台本・戯曲と比較し、別役の宮沢賢治受容を考究した。岡室美奈子は、日記や創作ノートに垣間見える「貧困」や「飢餓」に対する意識を手がかりに「そよそ族」という概念が成立した背景を探り、『あーぶくたった、にいたった』など「小市民もの」と

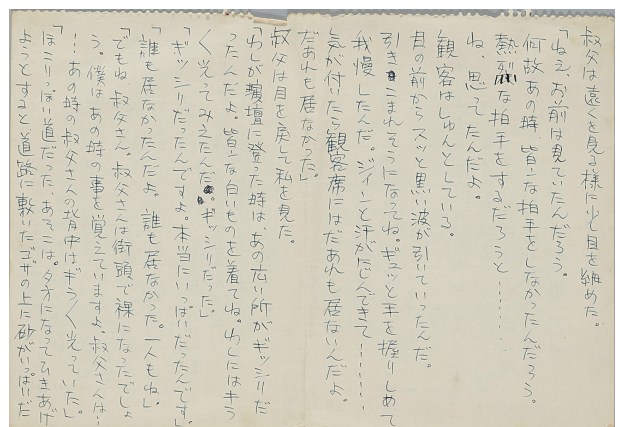
と称される戯曲へと至った道筋を考察した。

以上の調査から、沈黙、貧困、憎悪、自己犠牲といった別役作品の根幹を読み解く上で重要なキーワードが浮上し、初期創作にその片鱗が現れていることが明らかになった。また、宮沢賢治や深沢七郎等の演劇以外の文学への関心が劇文体の形成に少なからぬ影響を及ぼしていることもわかった。

今後の研究では1970年代以降の作品について沈黙、貧困、憎悪、自己犠牲といったキーワードを手がかりにして分析し、作風の変遷を整理したい。また、宮沢や深沢などの文芸作品や童謡、古歌への関心がどのように創作に反映されていたのかも明らかにしたい。



『ホクロ・ソーセージ』草稿 [64256]
Hokuro Soseiji manuscript



『象』の草稿と思われる自筆原稿 [64257]
An autographed manuscript believed to be for The Elephant

公募研究は審査を経た研究計画に基づく複数の共同研究プロジェクトにより構成され、演劇博物館の収集品の有効利用を目指すものです。プロジェクトに対し、本拠点は共同研究の場と資料を提供します。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は年度開始時点のものです。

公募研究 2

栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究 ——昭和初期の演劇・映画と音楽

研究代表者：中野正昭（明治大学文学部兼任講師）

研究分担者：白井史人（名古屋外国語大学世界教養学部准教授）、毛利真人（音楽評論家、早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、山上揚平（東京大学教養学部附属教養教育高度化機構特任講師）、小島広之（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

【研究目的】

栗原重一（1897-1983）は昭和初期にエノケン楽団、松竹キネマ演芸部、さらにトーキー初期のPCL映画製作所などで活躍した音楽家である。本研究はその旧蔵楽譜の一部である「エノケン楽団・栗原重一旧蔵楽譜（約1000点）」の調査・分析を行う。2020年度までに実施した楽譜資料（約900点）の基礎調査の成果を踏まえ、同時代の文献資料や、関連する楽譜コレクションの調査を組み合わせ研究を進める。栗原がともに活動した榎本健一（1904-1970）およびその周辺の楽士・楽団の活動実態の実証的研究を通して、広く同時代の演劇、音楽、映画を横断する興行や作品生成の過程を解明することを目指した。

【研究成果の概要】

○楽譜資料の調査・分析

前年度に続いて、デジタル化された楽譜資料のデータを活用して分担者・小島を中心に目録作成を進め、約1100点の資料目録を完成させた。輸入譜や作品別の手稿譜などが混在する栗原旧蔵資料に関して、楽曲名、作曲者・編曲者および出版年等の基本情報にくわえ、所蔵印や書き込みの有無などの資料状態を含めた全体像を把握することができた。書き込み内容の分析や出典調査など、本資料群のより詳細な分析・考証のための基盤を築くことができた。

○同時代の関連楽譜資料との比較考証

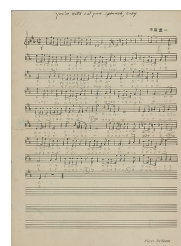
栗原重一とも接点があった篠原正雄（1894～1981）の旧蔵資料の基礎調査を実施した（下町風俗資料館所蔵）。篠原は浅草オペラなどの日本オペラの黎明期に活躍した音楽家である。栗原旧蔵資料にも篠原が所蔵していたとみられる楽譜が数点含まれており、篠原資料との比較考証は、栗原旧蔵資料の来歴を明らかにするための重要な意義を持つ。演劇博物館が所蔵する無声映画伴奏譜ヒラノ・コレクションや、アメリカやヨーロッパに点在する同時代の楽譜コレクションとの比較考証を進

めることで、栗原の活動をより広い文脈のなかで位置づけるための足掛かりとなることが期待される。

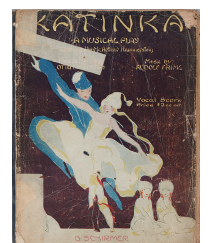
○成果報告冊子の作成

2020年度末に実施した公開研究会「栗原重一と同時代の楽士たち」の成果を中心に、2018年度以来の共同研究開の中間的な成果をまとめた成果報告冊子を作成した。所蔵印の分析(山上)、無声映画伴奏との関係(研究協力者：柴田康太郎)、映画『大陸突進』の音楽の創作プロセス(小島)、舞台作品の再構成の可能性(白井)など、栗原旧蔵資料を活用した研究成果をまとめた。さらに、レコードや映画音楽に関する栗原の活動の概観(毛利)、チームとして購入した榎本の関連舞台写真の考証(中野)、映画『孫悟空』の分析(研究協力者：紙屋牧子)など、栗原および榎本の多岐にわたる活動を分析する論考を収めた。また栗原旧蔵資料を一時期所有していた音楽評論家・瀬川昌久氏へのインタビューを活字化し、栗原とその周辺の音楽家に関する貴重な証言を記録に残すことができた。2021年末に逝去した瀬川氏のご功績と、本研究へのご協力にあたためて心からの謝意を記す。

今後の展望として、榎本の日本語訳詞歌唱などへ焦点を絞ったアプローチや、栗原の初期および晩年の活動の分析、さらに体系的な復元演奏・上演の試みなど、本年度の成果を踏まえたいくつかの方向性が浮かび上がってきた。



手稿譜 《You've Gotta Eat Your Spinach, Baby》[47624]
Handwritten Score 《You've Gotta Eat Your Spinach, Baby》



ヴォーカル・スコア《KATINKA》
(音楽：Rudolf Friml) [47368]
Vocal Score 《KATINKA》
(Music: Rudolf Friml)

公募研究 3

映画宣伝資料を活用した無声映画興行に関する基礎研究

研究代表者：岡田秀則（国立映画アーカイブ主任研究員）

研究分担者：紙屋牧子（武蔵野美術大学非常勤講師）、柴田康太郎（早稲田大学演劇博物館次席研究員）

【研究目的】

本研究は、演劇博物館が所蔵している「大正・昭和初期映画館チラシ」および関連資料の調査を通じて、日本の無声期映画興行に関する基礎研究をおこなうことを目的とし、同資料に記載された番組編成や上映および実演の形態、映画説明や音楽（伴奏・奏楽）の情報を具体的に把握することによって、いまだその詳細が歴史化されているとは言い難い、同時代の映画興行の様相の一端を明らかにすることを目指す。

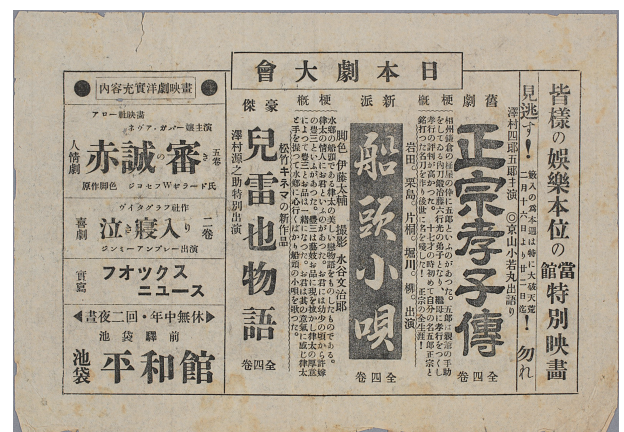
【研究成果の概要】

本年度は「大正・昭和初期映画館チラシ」約900点のうち、プログラムが映画分野に属する600点のチラシを中心に、前年度より作業を進めている目録の更新作業をおこなった。本年度は前年度からの目録完成版の作成を進めつつ、特に、都市部の「封切館」が発行したチラシを中心に、興行年月日の記載がない（場合によって「日」のみ記載されている）チラシについて、紙面の上映作品の情報を元に、映画館プログラム・新聞広告・データベース（日本映画データベース、日本映画情報システム、IMDb）・その他映画文献の封切情報を調査することによって、チラシの発行時期を同定する作業をおこなった。

無声期映画興行の実態を調査するうえで同時代の映画資料へのアクセスが不可欠となるが、その多くは散逸しており、所蔵している公共施設に限られる。そこで、自らの映画史料コレクションを活かして『活動写真弁士映画に魂を吹き込む人々』（共和国、2020年）を刊行したばかりの片岡一郎氏（活動写真弁士）を招き、研究会を開催した（10月28日、於：早稲田大学演劇博物館）。研究会には、研究代表者の岡田秀則、研究分担者の柴田康太郎、紙屋牧子、研究協力者の白井史人（オンライン参加／名古屋外国語大学）、佐崎順昭（国立映画アーカイブ）の参加に加えて、日本映画史研究家で収集家としても著名な本地陽彦氏（国立映画アーカイブ）も迎え、片岡氏のコレクションの実見を交えながら、無声期の映画資料の収集と活用に関して活発な意見交換をおこなった。

最終年度となる本年度は、資料に基づいた無声映

画の「復元」上映にも取り組んだ。これは、「大正・昭和初期映画館チラシ」に含まれる池袋平和館のチラシ（1923年頃と推定）より浮かび上がった、同時代の興行形態の一例を再現するという試みであり、また、その上映作品である『五郎正宗孝子伝』（天活、1915年）が、国立映画アーカイブに所蔵されているという巡り合わせによって実現にこぎつけたものである。『五郎正宗孝子伝』に関しては、説明台本も国立映画アーカイブに所蔵されていたことから、その内容に基づき、1920年代の映画興行における主流のスタイルと考えられる映画説明（片岡氏）を軸に、浪花節（東家一太郎氏）を挿入（説明台本には義太夫の記載もあったが今回は浪花節に置き換えた）、さらに、演劇博物館所蔵のヒラノコレクション（無声期映画館の専属の楽士の旧蔵資料）より選定した楽譜による和洋合奏（指揮・三味線：湯浅ジョウイチ氏、鳴物：堅田喜三代氏、他）を付した上映形態の「復元」を目指した。本年度は新型コロナウイルス感染拡大状況に鑑み、上映を収録したうえで、3月7日開催予定の公開研究会「映画宣伝資料にみる無声期映画興行の諸相」（オンライン開催）にて配信することとした。公開研究会では、岡田、柴田、白井、紙屋による当プロジェクト（2020-2021年度）の研究成果等に関する発表の他、『五郎正宗孝子伝』の映画説明を担当した片岡氏のトーク、児玉竜一氏（早稲田大学）による講評を予定している。



池袋平和館のチラシ（1923年頃）[012-003]
Image Flyer of Ikebukuro Heiwa-kan, around 1923

役者絵本の研究

研究代表者：桑原博行（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）

研究分担者：岩田秀行（跡見学園女子大学文学部名誉教授）、埋忠美沙（お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系准教授）、倉橋正恵（立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員）、加藤次直（東海大学現代教養センター准教授）、齊藤千恵（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、中村恵美（立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員）、桑野あさひ（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）

【研究目的】

役者絵本は、歌舞伎役者の肖像を主材とした絵本であり、ある種の役者名鑑的な要素も持ち合わせている。元禄期から近代まで長期にわたってその出版が見られ、各時代に活躍した役者の絵姿が確認できる。各時代の役者絵本を調査集成し、その画像データによって、各時代時代の役者とその似顔が判別可能となるような基礎資料を供することが本研究の目的である。特に、演劇博物館では、著名な役者絵本のほとんどを所蔵しており、研究進行に伴い蓄積される演劇博物館の資料群をデータ化し、資料目録を併せて公開する等の成果発信をおこなう。

【研究成果の概要】

役者の絵姿が名鑑的に拾える資料は正統的な「役者絵本」以外にも存在しているため、昨年度完成させた役者絵本基本目録をさらに充実させ、全体で104件の資料をリストアップすることができた。そのうち、演劇博物館に所蔵されている資料について、75点の撮影を行った。これらは画像データベースとして研究成果の情報発信を予定している。

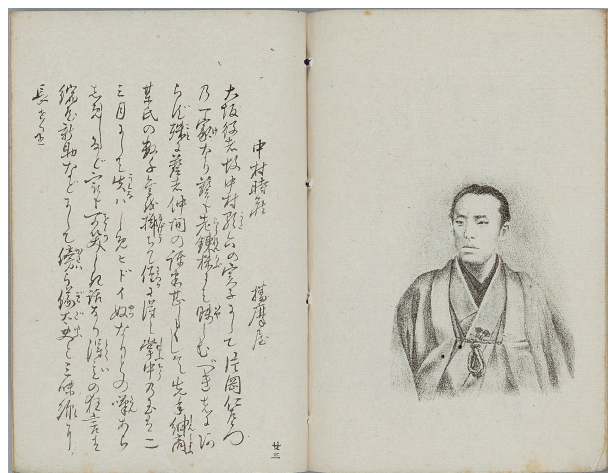
従来の「役者絵本」にも、せりふ本、役者細見、年代記、評判記等、別の区分に分類すべきものが存在する。しかしこれらは、役者絵姿を配して役者名鑑的な要素を持つために役者絵本とされているもので、今回はそうした種類のものを意識的にリストアップした。これらの役者絵本には下級役者や子役の絵姿も見られ、また役者の発句付き形式のものもあるため、通常確認がむづかしい役者の絵姿や、俳優が拾え、番付や評判記を補完するものとして貴重な資料となっている。

近代の役者絵本については、守川周重画『当世俳優三十六句撰』（明治14年〔1881〕）を始めとして、石版印刷の『萬歳 市中の賑ひ』（明治20年〔1887〕）、雑誌『歌舞伎』連載の西田堇坡「俳優百面相」の挿絵となった「芳幾肉筆役者絵」（明治34年〔1901〕）、『新似顔』初編～四編（大正4年〔1915〕）、松田青風画『歌舞伎俳草』（昭和4年〔1929〕）、岡本一平画『新水や空』（昭和5年〔1930〕）等を収めた。この画像データベースによって、江戸中期の『絵本舞台扇』以降、160年間の約2700件

を超える役者の絵姿が拾えることになる。

今回の調査で、書誌的に注意を要する発見があった。『役者声色図画』（嘉永元年〔1848〕）は『弘化未判 戲場年中鏡』（弘化5年〔1848〕）を再利用したもの、『声色楽屋鏡』（安政5年〔1858〕頃）は『声色早合点』（早稲田大学図書館蔵、嘉永6年〔1853〕）の改刻流用本であった。『声色早合点』は、天保2～4年〔1831～3〕に刊行された同名異種の別本が存在する。

なお、前号で石橋幹一郎旧蔵本とした『絵本舞台扇』は、前進座の河原崎長十郎旧蔵本が石橋氏に贈られ、それが石橋氏から演劇博物館に寄贈されたものである。



石版印刷『萬歳 市中の賑ひ』[ro03-00125_028]
Manzai fuku Chimata no nigiwai, lithographic printing for both text and illustrations



『声色楽屋図会』冒頭
[ro06-00017_002]
Kowairo gakuya zue opening



『弘化未判 戲場年中鏡』市村座、冒頭
[ro11-00051_003]
Koka hitsuji hyoban Shibai nenju kagami Ichimura-za, opening

公募研究

5

坂川屋旧蔵常磐津節正本板木の基礎的研究

研究代表者：竹内有一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）

研究分担者：鈴木英一（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、常岡亮（常磐津協会理事）、阿部さとみ（武蔵野音楽大学非常勤講師）、前島美保（東京藝術大学非常勤講師）、重藤暁（早稲田大学エクステンションセンター講師）、小西志保（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究員）

【研究目的】

坂川屋は、幕末の1860年に板株を常磐津正本板元の伊賀屋から受け継いで再刊を続け、以後昭和期まで新刊も行い、1987年頃まで板木で稽古本を刷り立てた板元である。江戸期創業の木版印刷業として最後まで板木を刷り続けた板元の一つとみられ、坂川屋に赴いて稽古本を仕立ててもらった経験を有する常磐津節伝承者も、今なお少なくない。本研究は、この板元が所蔵し現存する板木、約800点の資料群を研究対象とし、その目録を作成、公開することによって板木群の全貌を明らかにすることを目的とする。当公募研究により、2020年度は名題単位の簡易目録を作成し、2021年度は、板木一枚ごとの詳細目録を作成する。

【研究成果の概要】

2020年度に引き続き、2021年度には板木現物の書誌的調査、板木と既存撮影画像と過去の調査データの照合を進めた。それらをもとに、詳細目録（本文板木の版面単位ごと）を作成し、裏面・側面など未撮影の版面を中心に追加撮影を実施した。また今後、常磐津稽古本の出版システムを板木の側面からより深く考察していくため、外部研究者2名から板木研究に関する専門的知識の供与を受けながら研究ミーティングを開催した。このミーティングでは、板木の追加撮影で留意すべき点、板木の保全についても意見交換を行った。

2020年度からの一連の調査研究によって考察した当該板木群の主な特色および今後の課題は、以下の通りである。

- (1) 本文の板木は、板木1枚の表裏に2丁分を彫った「二丁掛け」を基本とし、書籍出版において最も一般的とされる「四丁掛け」の板木は存在しない。
- (2) 奥付・題簽の板木は、本文の板木とは大きさ・体裁が異なり、本文の板木と一続きにまとめられず、題簽板木を集めた箱および奥付板木を集めた箱に収納されている。（営業時の保管状態を概ね継承するものと推察される）。これは、本文の摺刷と、題簽・奥付の摺刷が、必ずしも同時に行われなかったことを示していると考えられる。
- (3) (2) は、複数の名題を顧客の求めに応じカスタマイズして合綴、納品製本する習慣があったことにも

関係しているだろう。現存する合綴本（複数の名題を集めた本）には、名題ごとの表紙（題簽）・奥付が無いものが少なくない。題簽・奥付を添付する手間を省き、より廉価な合綴本を顧客に提供するといった需要が、ある時期に高まっていたのかもしれない。

- (4) 題簽・奥付の板木の側面・小口に表記された名題略称は、(2)の考察を裏付けるもので、別置された本文板木との組み合わせを明示する目的で書かれたと考えられる。なお、題簽・奥付の板木については、2022年度以降に目録作成を行う予定である。
- (5) いくつかの板木に虫害の痕跡が認められる。演劇博物館への寄贈前（1995年頃）から認められていたものだが、再発防止のため保全対策が急務である。
- (6) 研究対象とした板木以外に、製本前の摺刷物等も板木と同時に収蔵されており、その保管状況を確認した。希有な資料のため、今後の整理分類に鋭意したい。



1994年10月5日、坂川氏知人の印刷会社倉庫（岩槻市）にて。約40個のダンボール箱に板木・摺刷物等が収納されていた。当時、鈴木・竹内が研究員として勤務した国立音楽大学音楽研究所が板木の予備調査を行った。多くの板木は埃にまみれて白っぽくなり、埃と汚れの除去に難渋した。手にしている板木は[29888-794] (32-38)。

Taken on October 5, 1994 at the printing company warehouse (Iwatsuki City) of an acquaintance of Mr. Sakagawa. Woodblocks, printed materials, etc., were stored in about 40 cardboard boxes. At that time, the Kunitachi College of Music Research Institute where Suzuki and Takeuchi worked as researchers conducted a preliminary survey of the woodblocks. Many were covered with dust and had turned whitish, making it difficult to remove the dust and dirt. The woodblock shown here is [29888-794] (32-38).

奨励研究

本拠点では2020年度より演劇博物館の若手研究者を中心に今後の本拠点の共同研究の基礎調査を行う「奨励研究」を開始しました。2021年度も6件の研究課題が採択され、多彩な研究が行われました。

2021年度の研究課題としては、①「新出浄瑠璃本群の調査研究」（原田真澄）、②「演劇博物館蔵資料調査による新派の基礎的研究」（後藤隆基）、③「日英の女性劇作家たち——16世紀から20世紀中頃まで」（石淵理恵子）、④「太田省吾関連資料の所蔵現状調査及びその活用方法研究——早稲田大学演劇博物館の所蔵資料を中心に」（金

潤貞）、⑤「演劇博物館所蔵の外国映画関連資料の調査と研究」（川崎佳哉）、⑥「大正期東京における映画配給網の基礎的研究」（柴田康太郎）の6件が採択された。学内外の研究者等と協力しながら、多岐にわたる膨大な演劇博物館所蔵資料の調査・考証が進められた。成果の一部は演劇博物館の企画展や常設展のなかで発表された。

拠点主催事業

本拠点は、文部科学省からの機能強化支援（2016～2018年度）以後、国内外の研究機関との連携事業、および資料のデジタルデータを活用した共同研究の開拓事業を進めてきました。コロナ禍によって対面での共同研究の実施に制約が生じている現在は、デジタルデータやオンラインツールを活用することにより、これまでの取り組みを新たな事業へと発展させています。

くずし字判読支援事業における国際ワークショップ

本拠点は、機能強化支援を受けた2016年以来凸版印刷とともに「くずし字OCR」の構築を図る「くずし字判読支援事業」を進めている。昨年度は、2019年度までの成果として蓄積されたくずし字字形データと、凸版印刷が開発した新たなオンライン翻刻支援システムを組み合わせた教育事業に着手し、早稲田大学の大学院生を対象に「くずし字翻

刻ワークショップ」を実施した。2021年度はこれをさらにお茶の水女子大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の大学院生、研究者を交えた国際的ワークショップとして拡大し、デジタルツールを用いた日本の古典演劇資料の共同翻刻、およびこれを土台とした国際的研究交流の可能性を開拓した。

デジタル化されたサイレント映画の活用

演劇博物館の所蔵資料のデジタル化を進め、またその利活用方法の可能性を広げる取り組みとして、2021年度は明治・大正期の筋書等の日本の演劇資料、および戦前の映像資料のデジタル化を進め演劇博物館の所蔵資料を更なる共同研究に開く環境整備を進めた。また、デジタル化された演劇博物館所蔵の映像資料を活用した取り組みとして、長尺の新派映画『うき世』（1916年）を対象に、資料考証を進めながら元フィルムに存在するフィルムの繋ぎ間違いをデジタルデータ上で修正した。加えて弁士や音楽家のパフォーマンスを収録し、歴史的な映像資料を現代に甦らせることを試みた。これは昨年度別作品を題材に実施した試みを応用し発展させたものであり、両年度の成果は演劇

博物館の秋季企画展「新派SHIMPA ——アヴァンギャルド演劇の水脈」で公開した。



弁士・邦楽演奏家による『うき世』上映の様子
Screening of *Ukiyo* with a *benshi* and a musician

コロナ禍における演劇に関する資料収集・調査事業

2021年度には、昨年度からの特別テーマ研究の成果を踏まえ、これを更に現代の国内外の演劇、芸術、社会の動向と広く関連づけ、多角的に議論する取り組みに着手した。次年度に国際シンポジウムを実施する前段階として、本年度末には国内の複数の資料館におけるコロナ禍をめぐる

るアーカイビング事業の再検討を図るシンポジウム「コロナ禍と博物館の二年：資料の収集・展示をめぐる課題と展望」を実施予定である。大阪市立吹田資料館、および北海道の浦幌町立博物館の関係者を招き、変化し続けるコロナ禍をめぐる議論を継続し、深めていく。



Mission and Vision

Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Minako Okamuro

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, operated by the Tsubouchi Memorial Theatre Museum, has been active as a Joint Usage Facility/Research Center, certified by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), since 2009. The unique feature of this center is its collaboration with the Theatre Museum that has a collection of more than one million materials. The center has access to these valuable unpublished and previously undisclosed materials from the museum's collection that have yet to be fully utilized academically. Although the center received its third certification last year, it has been difficult to conduct in-person collaborative research using primary materials due to the coronavirus pandemic. However, the center has taken advantage of the proven track record of the Theatre Museum's digital archives, and is currently engaged in new collaborative research that makes extensive use of digital data and online tools.

The center conducts three types of joint research: (1) Under principal research, wherein the center proposes research topics, a team focusing on the former collection of Minoru Betsuyaku developed the results of last year's research into the Special Spring Exhibition 2021 "The Making of Minoru Betsuyaku" at the Theatre Museum and for its catalog. Under selected research, four research teams conducted collaborative research targeting valuable materials housed at the Theatre Museum. The center adopted these teams in 2020 and has enriched its research activities since then. The center engages in activities involving the broad dissemination of research results to researchers both in Japan and abroad through the publication of a booklet containing research results, the implementation of public study groups, and the publication of a database of target materials. The aim was to deepen inquiry into four research topics—sheet music formerly belonging to Shigekazu Kurihara, pre-war movie theater promotional materials, picture books featuring popular actors, and woodblocks used for the original text of *tokiwazu-bushi*, a *jōruri* narrative music. (3) Under encouragement research projects, young researchers conduct research projects at the Theatre Museum involving

theater and video materials with an eye toward future collaborative research efforts. Researchers from both inside and outside the center work side-by-side, researching and examining a wide range of materials held by the Theatre Museum. This effort was promoted through six new research projects, the results of some of which were presented at special or permanent exhibitions. (4) Besides collaborative research centering on materials from the Theatre Museum, the urgent theme research projects, which were implemented in 2020, investigate and record situations and problems in the theater during the ongoing coronavirus pandemic. Two research teams developed surveys and studies for this purpose, attracting widespread attention to this effort. The team that dealt with Japanese theatrical arts during the pandemic developed last year's accomplishments into the Spring Exhibition 2021 "Lost in Pandemic—Theatre Adrift, Expression's New Horizons" and its accompanying catalog. In this exhibition, the research team dealing with overseas theater and cultural policy also expanded and revised a brochure containing research results from research results from 2021 and made it widely available in the exhibition rooms and on its website.

The center also promotes joint research development projects and collaborative projects with domestic and overseas research institutes by utilizing digital data. In the "Kuzushiji OCR" project that has been underway since 2016, in collaboration with Toppan Printing Co. Ltd., books containing *jōruri* were used in a workshop highlighting past achievements for educational purposes. This workshop was held in collaboration with the University of California, Los Angeles, and Ochanomizu University, Tokyo. Efforts were also made to promote multiple projects involving the utilization of digitized video materials and archives dealing with theater and culture during the coronavirus pandemic.

The Collaborative Research Center will continue to utilize the abundant research resources and digital technology of the Theatre Museum as it serves as a hub for joint research in collaboration with domestic and overseas research institutes. We sincerely ask for your continued support and cooperation in this endeavor.

Urgent theme research

In 2021, two research projects and surveys were conducted to learn more about live performances during the coronavirus pandemic both in Japan and overseas.

Urgent theme research 1

Survey study on the impact of the novel coronavirus pandemic on Japanese theater

Principal Researcher: Ryuki Goto (Assistant Professor, Theatre Museum, Waseda University)

Collaborative Researchers: Natsume Date (Journalist), Shoji Yoshida (Chief Marketing Officer, Longrun Planning Corporation)

In the present research, we continued to work on the theme from the previous year by conducting a fact-finding survey and collecting information and materials on the performances that were canceled or postponed due to the pandemic, the possibility of new forms of expression, and the relationship between society and the performing arts. Our intention was to record the “here and now” of life during the coronavirus pandemic from the perspective of theatrical performance, and convey this to future generations.

As the outcome of this research, the Spring exhibition entitled “Lost in Pandemic: Theater Adrift, Expression’s New Horizons” was held from June 3 to August 6, 2021 at the Theatre Museum. It was originally scheduled to open on May 17 but was postponed at the request of the Tokyo Metropolitan Government due to the declaration of the third state of emergency. The exhibition featured a period of more than a year, post February 2020, when the first pandemic restrictions were implemented. Accordingly, its main purpose was to emphasize cancellations and postponement of performances and the period of transition from the closure to reopening of theaters during the early stages of the battle against coronavirus, as well as to pass on these narratives to the next generation before individual memories and emotions are lost. The exhibit “Chronology of the Coronavirus and Theater” displayed around the exhibition hall also served to awaken the memories of individual

visitors.

According to a survey carried out by the research team, more than 2000 performances were canceled or postponed due to COVID-19 by June 2021. At this time, terms such as “online,” “social distancing,” “masking,” and “new normal” had come to symbolize the society during the pandemic. These terms indicate how our everyday lives, the society as a whole, and the theater and its space fared during such upheaval. We took up many new forms of expression to overcome such restrictions, with efforts to control infection during production. Similarly, we exhibited some materials in the museum collection that are related to epidemics and the theater since the early modern period. Trying to learn from the past is directly related to the question of what we can leave for the future. Additionally, we published a pictorial record as a part of the exhibition. It includes the testimonies and discussions of more than a 100 people, a chronological table that links social conditions and trends in the theater, and a list of canceled and postponed performances. It would also be a collection that people in the future would be able to refer if similar circumstances arise, making the summarized research significant and important. The future challenges of the project include the development of a more vertical/horizontal and internal/external collaboration in the field of theater arts.

Urgent theme research 2

Performing arts in the age of COVID-19: in Europe and the US

Principal Researcher: Masaru Ito (Senior Assistant Professor, School of Arts and Letters, Meiji University)

Collaborative Researchers: Ken Hagiwara (Professor, School of Global Japanese Studies, Meiji University), Shintaro Fujii (Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University), Yoichi Tajiri (Professor Emeritus, Kansai Gaidai University), Yoko Totani (Professor, Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University), Sayano Osaki (Italian Theatre Researcher), Sahoko Tsuji (Assistant Professor (without tenure), Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University), Rina Tanaka (Assistant Professor, School of Global Japanese Studies, Meiji University)

In this research project, we investigated the situation of the performing arts during the coronavirus pandemic in Western countries (France, Germany, Austria, Spain, Italy, United Kingdom, United States, and Russia) as well as the cultural policies that were adopted. Since the cultural policies and situations surrounding the theater vary for each country, we conducted a survey targeting the major metropolitan areas where the language each researcher specializes in is spoken. The main goal this year is to disseminate the results for the spring exhibition at the Tsubouchi Memorial Theatre

Museum, while continuing the research from last year to examine the situation of each country’s performing arts from a medium- to long-term perspective, as well as focusing on cultural policies to broadly explore relationships with the society. This year, we will add newer information to the results summarized last year and publish it, making it widely available in the exhibition rooms of the Tsubouchi Memorial Theatre Museum and the website of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts.

○ Principal research

The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Institute, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members shown below are those for the year in which the project started.

Principal research

1

A study on the collection of the autographed manuscripts of Minoru Betsuyaku

Principal Researcher: Itsuki Umeyama (Associate Professor, Department of Performing Arts, Faculty of Literature, Arts and Cultural Studies, Kindai University)

Collaborative Researchers: Minako Okamuro (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University, and Director, Theatre Museum, Waseda University), Ryuki Goto (Assistant Professor, Theatre Museum, Waseda University)

Research objectives

This study verifies the writing style of Minoru Betsuyaku's plays through the survey of the Collection of the Autographed Manuscripts of Minoru Betsuyaku, donated by __ in 2019, and materials related to his works. So far, the research on these works at the Collaborative Research Center has focused on materials that have yet to be examined, as the center strives to better understand the entire picture surrounding the large amount of materials that have been donated. This has made it clear that these materials include important documents related to creative writing notebooks believed to be from Betsuyaku's 20s and his early works from the 1960s. This year, we focused on examining materials thought to be important to provide a glimpse of these early creative activities.

Summary of research

Based on the survey results, we held the Special Spring Exhibition 2021 *Making of Minoru Betsuyaku: From His Unpublished First Play to the Soyosoyo Tribe* from June 3 to August 6, 2021. Along with research results, a panel presentation titled "The World of Minoru Betsuyaku as Seen from New Materials" was held online at the 15th annual conference of the Association for Studies of Culture and Representation on July 4. Curator Yuko Mukai (research collaborator) was responsible for the composition of the exhibition and introduced the audience to drafts of the phantom maiden drama *Hokuro Soseji* [64256], early representative work *The Elephant* [64257], and *Akatsuki*, which is believed to be the original draft of *The Elephant*. In addition, other important materials such as maps that can be used to trace the process involved until the completion of the work, which Betsuyaku himself created when working on the *Soyo-Soyo Zoku* series, were exhibited.

In the conference presentation, Itsuki Umeyama shed light on Betsuyaku's childhood compositions, creative writing notebooks from his early days and *Hokuro Soseji*, and explored the roots of *Chinmoku* (silence). Ryuki Goto compared the script of the animated film and radio drama based on Kenji Miyazawa's *Night on the Milky Way Train*, which seems to have been greatly influenced Betsuyaku's work. Moreover, Betsuyaku's published scripts and plays indicated the impact of Kenji Miyazawa on his ideas. Minako Okamuro explored how the concept of *Soyo-Soyo Zoku* was established using the awareness of *hinkon* (poverty) and *kiga* (hunger) as glimpsed in Betsuyaku's diaries and using the creative writing notebooks as clues. Okamuro considered these to be the path that led to plays known as *Shoushimin-mono* (works depicting the lower middle class), such as *Abukutatta Niitatta* (*Bubbling and Boiling*).

Important keywords for understanding the basis of Betsuyaku's works, such as *chinmoku* (silence), *hinkon* (poverty), *zou-o* (hatred), and *jiko-gisei* (self-sacrifice), emerged from the research, as it became clear that his early works foreshadowed these themes. Moreover, the research showed that his interest in non-theatrical literature such as the works of Kenji Miyazawa and Shichiro Fukazawa had a considerable influence on the formation of Betsuyaku's literary style.

In future research, we will seek to analyze literary works dating back to the 1970s using keywords such as *chinmoku* (silence), *hinkon* (poverty), *zou-o* (hatred) and *jiko-gisei* (self-sacrifice) as clues and subsequently sort through changes in Betsuyaku's style. We would also like to clarify how interest in the literary works of Miyazawa, Fukazawa, and others, as well as nursery rhymes and old songs, have been reflected in his literary works.

○ Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Institute provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members shown below are those for the year in which the project started.

Selected research

2

Research on musicians and musical bands through Kurihara's musical score collection: Music for stage and cinema during the early Showa era

Principal Researcher: Masaaki Nakano (Affiliated Lecturer, School of Arts and Letters, Meiji University)

Collaborative Researchers: Fumito Shirai (Associate Professor, School of World Liberal Arts, Nagoya University of Foreign Studies), Yohei Yamakami (Project Lecturer, Komaba Organization for Educational Excellence, The University of Tokyo), Masato Mori (Independent Researcher), Hiroyuki Kojima (Doctoral Program, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo)

Research objectives

Shigekazu Kurihara (1897–1983) was a musician active in the Enoken Orchestra and Shochiku Kinema's performance department, as well as the P. C.L. (Photo Chemical Laboratory) Film Studio. This research investigates and analyzes music scores formerly belonging to Shigekazu Kurihara and the Enoken Orchestra. Based on the results of an examination of musical score materials, we combined written materials with surveys of collections of related sheet music from the same period in this study. Through empirical research on the actual activities of Kenichi Enomoto (1904–1970) and other contemporaneous musicians and orchestras with whom Kurihara worked, we aimed to clarify the process by which a wide range of contemporary theaters, music, and films were produced.

Summary of research

○ Survey and analysis of the sheet music

Utilizing digitized materials and under the direction of Kojima, we proceeded to catalog, about 1,100 materials—a mix of imported music and manuscripts from Kurihara's collection. We included in the catalog not only basic information such as song title, composer/arranger, and year of publication, but also the status of the materials, such as the presence/absence of ownership stamps or handwritten annotations. We thus laid the foundation for more detailed analysis and verification of this material.

○ Comparative examination of related musical score materials of the same period

We conducted a baseline examination of older materials belonging to Masao Shinohara (Shitamachi Museum). Shinohara was a musician who played an active role in the early days of Japanese operas such as the Asakusa Opera. The Kurihara collection contains several musical scores thought to have been owned

by Shinohara, and comparative examination with the Shinohara materials has important significance to clarify the history of the Kurihara collection. Moreover, comparative examinations with the Hirano Collection—a collection of scores that accompanied silent movies held by the Theatre Museum—and collections of contemporary sheet music scattered throughout the United States and Europe are expected to serve as steppingstones in positioning Kurihara's activities in a broader context.

○ Creation of a brochure highlighting accomplishments

Focusing on the results of "Shigekazu Kurihara and Musicians of the Same Era," a symposium held at the end of 2020, we created a brochure summarizing the intermediate results of joint research carried out since 2018. Research results after analyzing materials from Kurihara's collection, such as analysis of stamps which testify ownership (Yamakami), relationships with silent film accompaniments (Kotaro Shibata, Research Collaborator), the process of creating music for movies (Kojima), and the feasibility of restoring theatrical productions (Shirai) are summarized in this brochure. Also included are articles that analyze a wide range of the activities of Kurihara and Enomoto, such as an overview of Kurihara's activities related to records and film music (Mori), an investigation of Enomoto-related stage photographs purchased by the team (Nakano), and an analysis of the movie *Son Goku* (Makiko Kamiya, Research Collaborator). We also included an interview with music critic Masahisa Segawa, who previously owned the Kurihara collection, providing valuable testimony about the musicians surrounding Kurihara.

Based on this year's results, we would like to see in the future a more focused approach to Enomoto's Japanese translations of songs, analysis of Kurihara's both early and later activities, and further attempts at systematic restoration of musical performances.

A basic research on silent film screenings using promotional movie materials

Principal Researcher: Hidenori Okada (Chief Curator, National Film Archive of Japan)

Collaborative Researchers: Makiko Kamiya (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Kotaro Shibata (Junior Researcher, Theatre Museum, Waseda University)

Research objectives

The objective of this research titled “Movie Theaters Flyers from the Taisho to the Early Showa Periods” was to conduct a baseline study on Japanese silent films through examinations of flyers from movie theaters during the Taisho to the early Showa periods and related materials. For our objective, we conducted specific research on the programming, screening, and demonstration forms, *benshi* (silent film interpreter), and music (accompaniments and intermission musical performances) information provided in the flyers and others. Through these investigations, we aim to clarify an aspect of the movie shows during the silent film era that have yet to be historicized.

Summary of research

This year, we updated the cataloging of 600 of the approximately 900 flyers belonging to the film genre. Thus, we continued to create a complete catalog version by focusing mainly on flyers issued for “first-runs” in urban areas and on flyers lacking dates (in some cases, only the day of the week was listed). We attempted to identify when these flyers were issued by examining movie theater programs, newspaper advertisements, databases (Japanese Movie Database, Japanese Cinema Database, and IMDb), and other information related to movie releases.

Access to contemporary film materials of that time is essential to investigate silent film performances, but many of these materials are now missing, and only a few public facilities are in possession of those few that remain. *Benshi* Ichiro Kataoka, who had just published *The People Who Brought Soul to the Movies* (Kyowakoku, 2020), was invited to hold a study group on October 28 at Theatre Museum, Waseda University. In addition to the study group participation of Principal Researcher Hidenori Okada, collaborative researchers Kotaro Shibata and Makiko Kamiya, and research collaborators Fumito Shirai (online participation; Nagoya University of Foreign Studies), Yoriaki Sazaki (National Film Archive of Japan), and Haruhiko Honchi (a Japanese

film historian and well-known collector; National Film Archive of Japan) also attended. The group actively exchanged opinions on the collection and utilization of movie-related materials from the silent movie period, including actual observing the Kataoka collection.

Marking our final year, we also spent this year concentrating our efforts on materials-based restoration screenings of silent film. This attempted to reproduce an example of the entertainment style of the period that emerged from a flyer of Ikebukuro Heiwa-kan (around 1923) included in the “Movie Theaters Flyers from the Taisho to the Early Showa Periods.” The screening project was made possible because the film and *benshi*-script in question, *Goro Masamune Koshiden* (Tenkatsu, 1915), was in the collection of the National Film Archive of Japan. In this project, based on the *benshi*-script, the *benshi* performance (by Kataoka), with a mainstream style in the 1920s, with the *naniwabushi* (*rōkyoku*; storytelling accompanied by a shamisen) performance (by Ichitaro Azumaya) partially inserted. The style of dialogue in this *benshi* script included the *gidayūbush* (narrative style in the puppet theatre tradition), but for this project, here it was replaced with *naniwabushi*. We also aimed to restore the screening format using a Japanese-Western ensemble (conduct and *shamisen* by Joichi Yuasa, *narimono* [a musical instrument] by Kisayo Katada, et al.) from a score selected from the Hirano Collection of the Theatre Museum (scores used by the resident musician of a movie theater during the silent movie era). As for the means of showing it to the public, this year we decided to distribute it at the “Aspects of Silent Film Promotion in Movie Promotion Materials,” an online conference scheduled on March 7, 2022, after recording the screening. In addition to presentations on the research results of this project (2020–2021) by Okada, Shibata, Shirai, and Kamiya at the conference, plans are to have Kataoka, who is responsible for providing an explanation on *Goro Masamune Koshiden*, to give a talk while Ryuichi Kodama (Waseda University) provides commentary.

A comprehensive study of actor picture books

Principal Researcher: Hiroyuki Kuwahara (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University)
 Collaborative Researchers: Hideyuki Iwata (Emeritus Professor, Faculty of Letters, Atomi University), Misa Umetada (Associate Professor, Faculty of Core Research, Humanities Division, Ochanomizu University), Masae Kurahashi (Visiting Researcher, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University), Tsugunao Katō (Associate Professor, Tokai University Center for Liberal Arts), Chie Saitō (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University), Emi Nakamura (Visiting Researcher, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University), Asahi Kuwano (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University)

Research objectives

Actor picture books are compilations of kabuki actor portraits that also contain features that serve as actor directories. They have been published from the late seventeenth century through modern times, and make it possible to discover information about actors of every era. The purpose of this study is to survey and compile information on actor picture books from each period and use this image data to provide basic material for identifying actors. This study compiles data that has been gathered as the result of successive research based in particular on the actor picture books owned by the Waseda University Theatre Museum, which holds most of the well-known titles. We will then share the results, as well as publish a catalog.

Summary of research

Since there are other materials besides conventional actor picture books with portraits that can be used as directories for actors, we updated a basic list of actor books that had been completed just last year, so that now a total of 104 materials are listed. Seventy-five of these are photos of items from the Theatre Museum. We plan on disseminating these research results as an image database.

Although some traditional actor picture books should ideally be reclassified into different categories, such as dialogues, actor trivia, chronicles, and commentaries, we continue considering all of them as actor picture books because they can also serve as actor directories. Therefore, we made a conscious decision here to note these titles. As these actor picture books contain portraits of low-ranking and child actors as well as sometimes include each actor's *hokku*, they serve as invaluable supplements to actor rankings and

commentaries with pictures of difficult-to-recognize actors and poetry names.

Among the modern actor picture books included in this database are: *Tōsei yakusha sanjū rokkusen* 当世俳優三十六句撰, illustrated by Morikawa Chikashige (1881); *Manzai fuku Chimata no nigiwai* 萬歳市中の賑ひ, produced by lithographic printing (1887); actors' paintings by Yoshiiku 芳幾肉筆役者絵 (1901) that were reproduced as illustration for Nishida Kinpa's serialized essay *Haiyū hyakumensō* 俳優百面相 in the periodical *Kabuki* 歌舞伎; *Shin nigaoe* 新似顔, volumes 1-4 (1915); *Kabuki omokagegusa* 歌舞伎倂草, illustrated by Matsuda Seifū (1929); *Shin mizu ya sora* 新水やそら, illustrated by Okamoto Ippei's picture (1930); and several others. Using this image database, we found pictures of more than 2,700 actors, spanning the 160 years since the *Ehon butai ōgi* 絵本舞台扇 was published in the mid-Edo period.

Moreover, this study includes discoveries requiring bibliographical attention. *Yakusha kowairo zue* 役者声色図画 of 1848 is a re-rendering of *Kōka hitsuji hyōban Shibai nenjū kagami* 弘化未判 戲場年中鏡 (1848), while *Kowairo gakuya kagami* 声色楽屋鏡 of circa 1858 is a revision of an adaptation of *Kowairo hayagaten* 声色早合点 of 1853, known through a copy of Waseda University Library Collection, 1853. However, there are also completely different works sharing the same title *Kowairo hayagaten*, published between 1831 and 1833.

In the previous volume of *News Letter*, we referred to *Ehon butai ōgi*, which was previously owned by Ishibashi Kanichirō. However, the precise provenance is that the copy was donated to the Theatre Museum by Mr. Ishibashi, who was previously presented with it by the former owner of Kawarasaki Chōjūrō of Zenshinza.

A basic research on tokiwazu-bushi woodblock printings formerly owned by Sakagawaya

Principal Researcher: Yuuichi Takeuchi (Professor, Research Institute for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts)

Collaborative Researchers: Eiichi Suzuki (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University), Ryou Tsuneoka (Director, Tokiwazu Association), Satomi Abe (Part-time Lecturer, Musashino Academia Musicae), Miho Maeshima (Part-time Lecturer, Tokyo University of the Arts), Gyoo Shigefuji (Part-time Lecturer, Edogawa University), Shiho Konishi (Collaborative Researcher, Kyoto City University of Arts)

Research objectives

Sakagawa-ya received woodblock prints from Iga-ya, a publisher of original *jōruri* narratives, in 1860, during the last days of the Tokugawa shogunate, with new editions published until the end of the Showa period. By 1987, these were used to create practice books for *jōruri* and *nagauta*. Sakagawa-ya, a woodblock printer during the Edo period, is thought to be one of a handful of publishers who continued to use woodblocks. Even today, there is much *Tokiwazu-bushi* folklore about the experience of going to Sakagawa-ya to have a practice book made. This research targets existing woodblocks owned by publishers, of which there are about 800, with the objective of providing a full accounting of woodblock groups by creating and publishing a catalog. Through this public appeal for research, in 2020, we sought to create a simple catalog of each play/act title, while in 2021, we aimed for a detailed list of each woodblock.

Summary of research

Moving from 2020 to 2021, we proceeded with a bibliographic survey of the actual woodblocks, collating blocks and existing photos/images with past survey data. Based on these, we created a detailed catalog (organized by each major woodblock surface) with additional photography centering on unphotographed surfaces such as the back and sides. Moreover, to consider the publishing system more deeply for *jōruri* practice books from a woodblock perspective, a research meeting was held where two outside specialists in the field shared their knowledge. At this meeting, we exchanged opinions on points to consider when taking additional photographs of woodblocks, and on the conservation of these blocks.

Major features of the woodblocks and pertinent future issues as considered by a series of research studies beginning in 2020 are as follows:

(1) Woodblocks as presented in the text are of the *Nichōgake* variety, with carvings on the front and back

of single blocks. There are no *Yonchōgake* blocks, which were the most prevalent in book publishing.

(2) Colophon and play/act title woodblocks were of different sizes and appearance than text woodblocks. These were stored separately from text blocks, typically in separate boxes for colophon blocks and play/act title blocks. (It is presumed that this storage method was largely kept in place when the business changed hands.) This is thought to indicate that printing of the text and the play/act title and colophon was not always performed at the same time.

(3) Point (2) is probably related to the custom of customizing multiple play/act titles according to the customers' request, binding them, and then readying them for delivery. Many existing bound volumes (books containing multiple play/act titles) do not have covers or colophons for individual play/act titles. Demand for providing customers with cheaper bound books by eliminating the trouble of attaching play/act titles and colophons may have increased at some point.

(4) Abbreviations on the sides and edges of the play/act title and colophon woodblocks support the arguments made in (2). It is thought these were written to indicate matches with separately positioned text woodblocks. The play/act title and colophon woodblocks will be formally cataloged beginning in 2022.

(5) There are signs of insect damage on several woodblocks. Thus, there is an urgent need for conservation measures, which were approved prior to donation (around 1995) to the Theatre Museum, to prevent recurrence.

(6) In addition to woodblocks that are the subject of this study, we confirmed the storage status of prebound *Syūsatsu* (printed material created by impressing a sheet of paper on an inked woodblock), which were stored at the same time as the woodblocks. Since these are rare, they should be sorted and classified sometime in the future.

Encouragement research project

In 2020, we embarked on “encouragement research,” wherein we conduct collaborative research with an emphasis on young Theatre Museum researchers at the center. In 2021, six research projects were adopted, and a variety of research was conducted.

Six research projects from 2021 were adopted: (1) “Survey research on the new main group of *jōruri*” (Masumi Harada); (2) “Foundational investigation into Shimpa Dramas materials collection at the Theatre Museum” (Ryuki Goto); (3) “Study on Japanese and British female playwrights from the 16th century to the middle of the 20th century” (Rieko Ishibuchi); (4) “Study on the current state of Shogō Ota-related materials and research on how they are being utilized, with a focus on materials held by the Waseda

University Theatre Museum” (Kim Yun Jeong); (5) “Survey and research of foreign film-related materials in the Theatre Museum” (Keiya Kawasaki); and (6) “Foundational investigation into movie distribution networks in Tokyo during the Taisho era” (Kotaro Shibata). A wide variety of materials from the Theatre Museum were investigated and examined in cooperation with researchers inside and outside the university. Some of these results were presented in special and permanent exhibitions at the museum.

Projects organized by the center

Having received functional enhancement support from the MEXT from 2016 to 2018, the center has been busy promoting collaborative projects with domestic and overseas research institutes as well as joint research development projects utilizing digital data. With the Covid-19 pandemic, in-person joint research is currently restricted. Thus, utilizing digital data and online tools, we are redefining existing efforts into new operations and developing our projects, looking into the future.

International workshop on deciphering *kuzushiji*

Ever since it began receiving support for functional enhancement in 2016, the center has been holding “*kuzushiji* reading support projects” in conjunction with Toppan Printing Co., Ltd., (hereafter, Toppan Printing), with the idea of creating a “*Kuzushiji* OCR”. In 2020, the center embarked on an educational project combining cursive script data accumulated from results up to 2019 and the new online deciphering support system developed

by Toppan Printing, it also held “*kuzushiji* decipherment workshops” for Waseda University graduate students. This was further expanded as an international workshop in 2021 with graduate students and researchers from the University of California, Los Angeles, and Ochanomizu University, Tokyo, participating. The center explored the possibility of joint reproduction of classical Japanese theater materials using digital tools and subsequent international exchanges.

Utilization of digitized silent films

To promote the digitization of materials held by the Theatre Museum and improve the feasibility of utilizing them, the center digitalized Japanese theater materials such as scenarios and prewar movie materials from the Meiji and Taisho eras. The aim was to foster environmental improvements, whereby materials held by the Theatre Museum would be made available for further joint research. Moreover, to utilize digitized movie materials held by the Theatre Museum, we targeted *Ukiyo* (1916), a film which has survived remarkably better than most contemporary

Japanese silent film. While carrying out document verification the center corrected the sequence of the movie whose existing film was wrongly spliced. In addition, the performances of a *benshi* (live narrator) and a musician were recorded in an effort to bring the historical movie materials back to life for the current audience. This is an application of an attempt made last year for another work, and the results of both were presented to the public at the Theatre Museum in the Autumn Exhibition 2021 “Finding Avant-gardness in Shimpa Dramas.”

Theater-related data collection and research during the Covid-19 pandemic

Based on the results of the urgent theme research from 2020, the center embarked on a multifaceted discussion in 2021, further linking these studies to contemporary domestic and international theater, art, and social trends. The center is planning to hold a symposium in March 2021 titled “Museums in the Age of the Covid-19 Pandemic: Issues and Prospects Concerning Collection and Exhibition

of Materials”, where the archiving activities related to the coronavirus will be reexamined. We will invite the curators of the Suita City Museum in Osaka and the Urahoro Municipal Museum in Hokkaido, to discuss archiving in the changing situations of the pandemic to seek a deeper understanding of it.

編集：柴田康太郎 長谷川理絵
翻訳：カクタス・コミュニケーションズ株式会社
発行者：文部科学省「共同利用・共同研究拠点」
早稲田大学演劇映像学連携研究拠点
拠点代表：岡室美奈子
早稲田大学演劇映像学連携研究拠点
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学早稲田キャンパス6号館
TEL：03-5286-1829 URL：http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/

Edited by: Kotaro Shibata, Rie Hasegawa
Translated by: Cactus Communications
Published by: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan
“Joint Usage / Research Center”, Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts,
Theatre Museum, Waseda University
Center Leader: Minako Okamuro
Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Waseda University
Building 6, Waseda Campus, Waseda University, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku,
Tokyo, 169-8050
(+81)3-5286-1829 URL: http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/